

# 紀 要

## 第10号

— 目 次 —

序	
縄文時代石器研究の方法論序説	(鈴木 康 二)
弥生社会からみた独鈷石	(田 井 中 洋 介)
犬上川左岸扇状地における考古学的研究	(近江歴史クラブ)
犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳群について	(北 原 治)
近江における階段式石室の検討	(堀 真 人)
犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室	(辻 川 哲 朗)
古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地における馬具副葬土壙墓について	(山 中 由 紀 子)
犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について	(中 村 智 孝)
犬上川左岸扇状地周辺の生産と流通の概観	(畑 中 英 二)
東大寺水沼荘の開発	(神 保 忠 宏・畑 中 英 二)
「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察	(重 岡 卓)
古代王権論にむけて	(細 川 修 平)
日野町出土の瓦器碗をめぐって	(土 垣 幸 徳)
滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境	
井口城とその立地	(神 保 忠 宏)
水と環境教育	(佐 野 静 代)

1997. 3

(財)滋賀県文化財保護協会

# 犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について

中村 智孝

## はじめに

今回の研究の課題は、犬上川左岸扇状地における古墳に副葬された土器の様相を把握し、そこで認識することのできる地域の様相を読み取ろうというものである。

この犬上川左岸という一定の地域の中において、土器様相の流れを把握しその流れの中で大きく変化が認められる画期を導き出すことから、地域の変化を読み取ることができると考える。

また一方で、この地域に認められる副葬された土器をもとに、その一群に認められる品質的な差を認めることによって、地域としての・地域内における地点的な様相を把握していきたいと考えている。

以上のような目的を把握することは、この地域における古墳への土器副葬という習俗から、地域社会の様相を把握できることにつながるものであると考えている。

## 1. 様式的な把握

各古墳出土の土器様相についてまとめていくわけであるが、以下に畑中氏の論文の中で設定された各段階ごとに分けてその特徴及び画期について記していきたい。なお、図1の方に様相及び流れをまとめた図面をつけてあるので参照していただきたい。

### 第1段階古相

この時期において基準となる杯Hのサイズは、立ち上がり径が約14cm前後のものである。陶器編年でいうところのMT15型式からTK10型式に併行するものである。

この時期には、現在までのところ塚原古墳群Aの土壌2から出土している8個体の一括資料がこの一群に相当する。ただこの他にも、塚原古墳群Aの11号墳・19号墳に含まれる杯蓋の一部に、この一群に相当すると考えられるものが存在する。

塚原古墳群Aの土壌2は、塚原古墳群形成初期に作られる土壙墓であるが須恵器の蓋杯が7点と壺が

1点副葬されていた。この壺は、次の第1段階中相において認められる壺③に該当するものである。ただ、資料が乏しいため様相把握は困難である。

### 第1段階中相

この段階において基準となる杯Hのサイズは、立ち上がり径が約12cm以上のものである。陶器編年でいうところのTK43型式からTK85型式に併行するものである。

この時期にあたる古墳は、金屋古墳（古相と認識できる一群）をはじめ谷田古墳51・北落古墳群（SX9404など）・塚原古墳群（Aの10号墳（杯身1点）、11号墳、19号墳、Bの4号墳など）が該当するもので、犬上側左岸において古墳群が築かれはじめる段階にあたるものである。

この時期における様相的な特徴をまとめてみると、高杯においては金屋古墳で見られるような長脚の無蓋高杯や谷田古墳のような短脚の有蓋高杯という二種類の高杯が認められる。線については、先の両古墳及び北落古墳群（X1号墳）で認められるが、口縁部を大きく開きやや長めの頸部といったプロポーションを呈するものが認められる。提瓶等については、谷田古墳に提瓶が1点確認されているが、それ以外についての資料がないため詳細は不明である。

この段階における特徴的なのが壺・器台である。壺類に関してみると、概ね3種類のタイプが認められる。それは、壺①は金屋古墳・北落古墳群（3号墳）で出土しているような台付きの有蓋壺、壺②は金屋古墳・塚原古墳群（1号墳）・北落古墳群（SX9205）などで出土している短頸壺、壺③は金屋古墳・谷田古墳・北落古墳群（SX9404）で出土しているような広口壺の3つのタイプである。壺③にあたるものに関しては、口縁部がほぼ垂直に伸びるものと外反するものとに細分される可能性がある。なおこのほかに、金屋古墳においてこの時期の出土例としては一例のみであるが土師器の直口壺が確認されている。土師器の壺は、中期から見られるもので

あるが新しい段階においては見られないものであるとされている。

このような三つのタイプに分けられる壺の中で、この段階において特徴的であるのが壺①としたものである。壺①に関しては、金屋古墳で4個体・北落古墳群で口縁部のみ1個体確認されているほか今までのところ出土例がない。この壺①は、この段階においても出土量が少ないが、この後に続く段階になると確認されておらず、したがってこの段階における特徴としてあげることができる。

もう一方で、この段階の特徴としてあげることができるのが器台がある。器台については、金屋古墳・北落古墳群（3号墳）で確認されている。この器台に関しても、この段階以降には出土例が今までのところ確認されておらず、壺①と同じくこの段階を特徴づけるものとして考えられる。

### 第1段階新相

この段階において基準となる杯Hのサイズは、立ち上がり径が約11cm台のものである。陶邑編年というところのTK209型式・TK217型式に併行するものである。

なおこの地域においてこの段階にあたる古墳は、北落古墳群（X2・X3・SX9207・SX9204・SX9210）・四ツ塚古墳・塚原古墳群（A—2号墳・10号墳・13号墳とBの7号墳・3号墳）・小川原遺跡（SK2など）等であり、確認されている古墳及び出土している須恵器の数は比較的少ない。

この段階における様相的な特徴をまとめると、高杯に関しては四ツ塚古墳で、長脚化のピークとして認められるような長脚の高杯が有蓋、無蓋の両方で確認されている。この時期においては短脚の高杯は確認されていないのだが、前の段階の谷田古墳に認められるような短脚の高杯は、この次の段階に短脚の高杯が存在することから、おそらくはこの時期にも存在している可能性が高いものと考えられる。したがって、短脚、長脚、有蓋、無蓋とすべてのバリエーションで高杯は各段階に存在するものと考えられる。

塚原古墳群（X3）で認められるように存在している。

提瓶等に関しては、図1に上げた中では記すことができなかったが、塚原古墳群Aの中に数個体認めることができる。これに関しても概ね塚原と同じく第1段階の流れのまま存在していると考えられる。

壺に関しては、第1段階中層ところで記したように壺①に関してはこの段階には認められていない。壺②に関しては、提瓶等と同じく塚原古墳群Aの資料に認めることができる。壺③に関しては、北落古墳群（SX9207・X2）、塚原古墳群Aに認められる。

このように壺は、前段階の様相の中から2つのタイプのものが認められるのだが、この時期において新たに認められるのが徳利型平底壺である。この徳利型平底壺は、犬上川左岸地域では塚原古墳群・小川原古墳群中において認められるものであるが、平底という渡来的な様相を示す形態をした壺として注目されるものである。

なおこのような特徴的な遺物との関連でいうと、塚原古墳群の中には装飾付き台付き塚などをはじめ極めて特徴的な遺物が多く認められる。特徴的な遺物自体の意味を問うことはできないが、少なくともそれぞれの製品が独自のニーズにより作られたオーダーメイドの製品であることは重要な点である。

なお前段階のところでも述べたように、この段階になると器台は認められなくなる。

### 第2段階古相

この段階において基準となる杯Hのサイズは、立ち上がり径が約10cm台のものである。陶邑編年というところTK217型式に併行するものである。

なおこの地域においてこの段階にあたる古墳は、北落古墳群（SX9301）・栗林古墳・塚原古墳群（Aの1号墳・6号墳・7号墳など、Bの2号墳・5号墳・8号墳）・尼子遺跡（1号墳・2号墳・9号墳・11号墳）であり、尼子遺跡など新たに古墳群を築き出すところも出てくる。

なお、この2段階は古相・新相とに別れる可能性が指摘されているが資料点数の少なから様相把握という目的のためにあえて分けずに扱う。

この段階における様相の特徴をまとめてみると、高杯に関しては、第1段階新層のところでも述べた

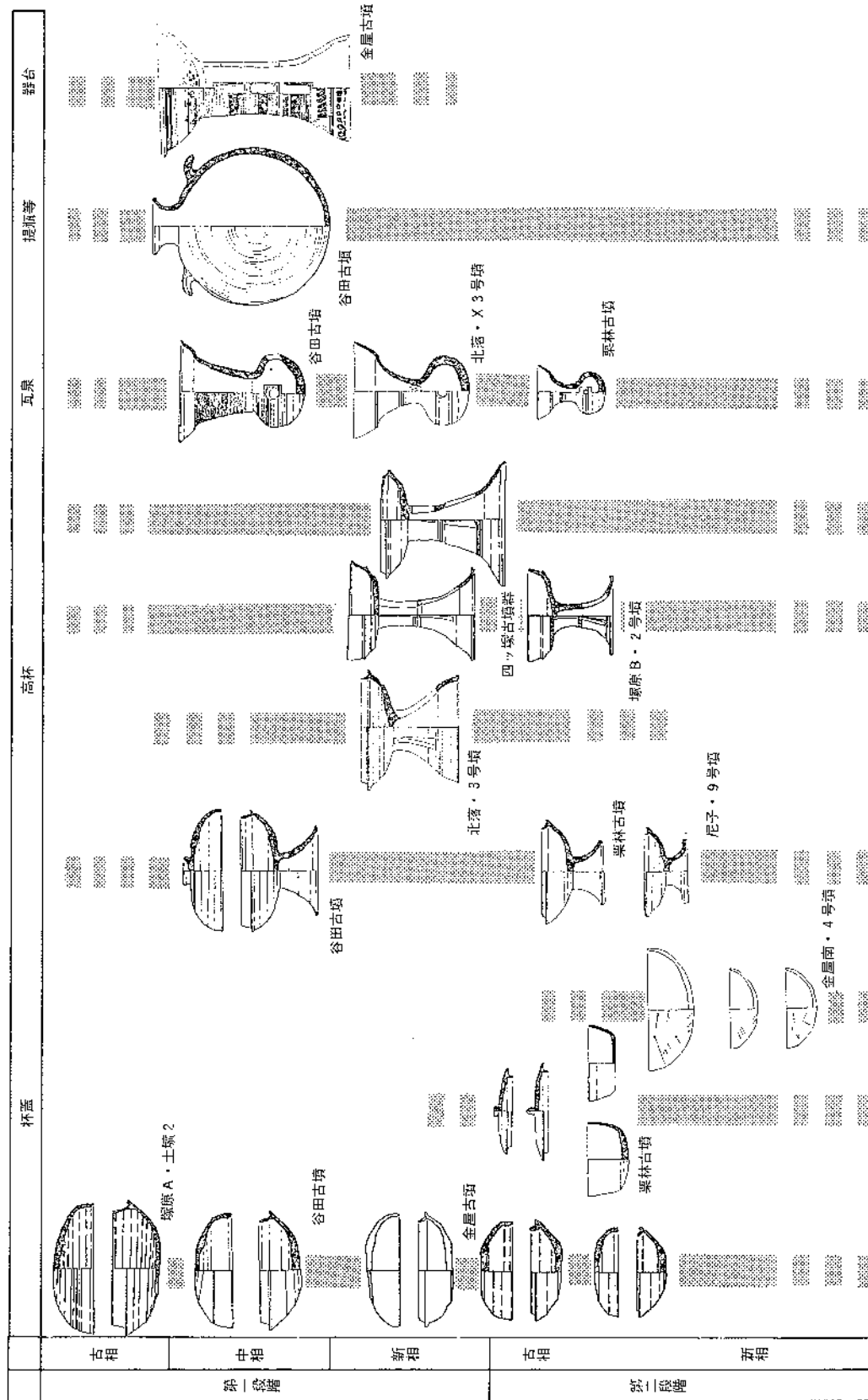


図1-1 大上川左岸扇状地の古墳出土土器様相 (スケールは1/8)

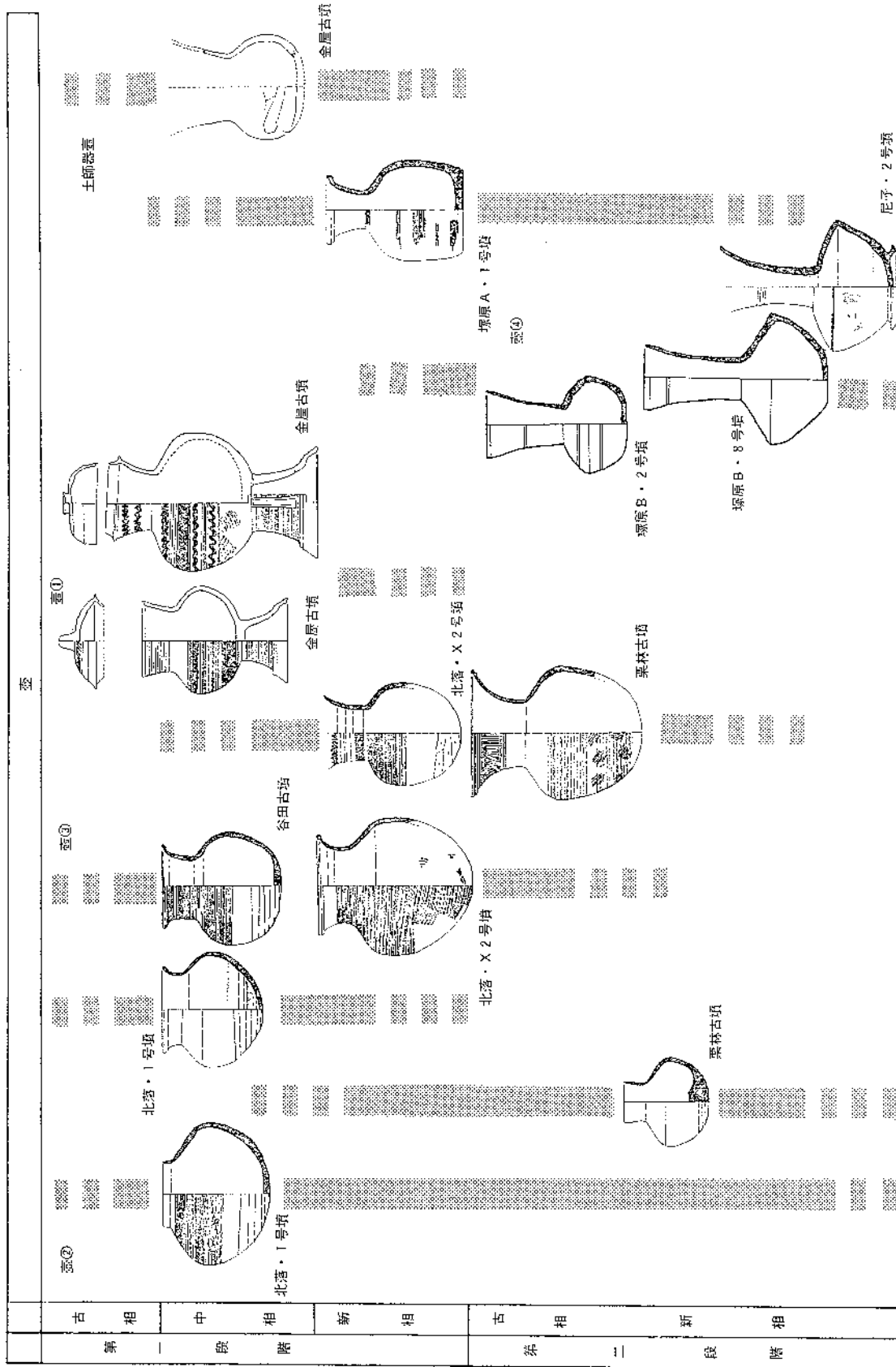


図1-2 犬上川左岸扇状地の古墳出土土器様相(スケールは1/8)

ように概ねすべてのタイプのものを認めることができると考えられ、また塚についてやや小型のものが栗林古墳において認められる。提瓶等についても、北落古墳群（S X 9301）・塚原古墳群（Bの5号墳）で認められる。

壺類は、第1段階中相に続いて新相でも認められた壺②・③については、この段階においても認めることができる。ただ、この段階において塚原古墳群B（5号墳）に台付きの壺が認められる。この壺は、台付きの壺であるという点についてみれば、壺①の流れの中で新たに発生してきたものであるという可能性が考えられる。なお、この壺は焼きひずみの激しいものである。

以上のようなこれまでの流れの中で考えられる壺とはほかに、この段階になって新たに認められるようになったタイプの壺が現れてくる。それは壺④とした長頸壺である。この壺④は北落古墳群（S X 9301）・塚原古墳群（Aの20号墳、Bの2号墳・5号墳・8号墳）・尼子遺跡（2号墳・11号墳）で認められるものである。この壺④は、さらに細分できる可能性を持っているが、ここではこれ以上の細分については触れない。なおこの形態の壺は、他の地域においてもこの段階にあたる古墳の副葬品に、新たに土器様相の中に出てくるものである。

金屋南古墳群においては、これまで第1段階中層の金屋古墳においてのみ認められた土師器が、土師器の杯Cの副葬という形で出現しており新たに変わった要素として捉えることができる。

### 3. 土器様相のまとめ

以上見てきたように、犬上川左岸扇状地における古墳副葬品における土器様相は、第1段階古相より第2段階までの4段階の中でいくつかの画期を持っているものと考えられる。

犬上川左岸扇状地における古墳副葬土器の主体は、杯H、高杯等である。この傾向は、第1段階古相より第2段階まで変わらないものである。まず、このことを基準として土器のセット関係を時間的な流れの中で見てみたい。

杯類に関しては、大きく2点で画期を見出すことができる。第1点は、栗林古墳等で認められる須恵

器の杯Gが第2段階より副葬されることである。第2点としては、金屋南古墳群4号墳で認められる土師器の杯Cの副葬が第2段階で認められることである。なお、この杯Cの副葬という点においてみれば、この古墳は第2段階でも新しい様相を持つものであると考えられる。

次に壺類であるが、壺類は第1段階中相から多く認められるが、すでにこの段階から異なるタイプのもが多く認められ、他の器種に比べ形態のパラエティーさが目立つと思われる。ただ、全体的な流れとして時間が下がるにつれ形態が画一化されてくる傾向にあるものと考えられる。このことは、壺類の中・土器全体の中の大きな画期として考えられる壺①とした蓋付きの台付き壺が第1段階中相以降認められなくなることや、第2段階より壺④の副葬が多くなる古墳で始まるということにも認められる。

壺類においては、第1段階中相の金屋古墳の副葬品の中に認められる土師器の直口壺の副葬という点も特徴としてあげることができる。この土師器の直口壺は、古墳時代中期より副葬される古い様相のものでこの段階以降の副葬品の中には認められないとされている。

この土師器の壺とは逆に土師器の甕は、塚原古墳群Aなどに第2段階から周溝出土のものも含めて出土例が認められる。この土師器の甕の副葬は金屋古墳において認められた土師器の壺の副葬とは別に新たにこの段階において副葬土器セットもしくは供献土器セットの中に含まれるようになったものである。

以上のような時間的な流れの中で認められる画期といったものの他に、この地域内において認められる画期が存在する。

まず、第1段階中相において認められる器台（大型品）の副葬という点が上げることが出来る。この器台の副葬は、この段階以降認められなくなるものであるが、現在のところ金屋古墳や北落古墳群（X 3号墳）において合計3点確認されている。

次に、第1段階新層より多く認められる徳利型平底壺をはじめとしたオーダーメイド製品が副葬されるという点である。このオーダーメイド製品は、特に塚原古墳群に多く認められ徳利型平底壺のほか裝飾付き台付き罍や鈴付き長脚高坏等の例を挙げるこ

とができ、独自のニーズによって副葬する須恵器を得ているということを示す重要な資料である。なお、多くのオーダーメイド品の須恵器を持っている塚原古墳群においてはすべての段階において壺が比較的多く副葬されているように思われるなど、若干他の古墳群とは様相は異なるのかもしれない。

以上のように、大上川左岸扇状地においては土器様相という観点からいうと様々な画期を認めることができる。ただこれらの画期は、大きく2つの要素にまとめることができるものと思われる。

それは、時間的に見た場合時間が下がるにつれ土器の組成が画一化されてくるという地域を越えた影響が認められるという点と、地域的に見た場合第1段階新層を中心に認められる多くのオーダーメイド製品の副葬という地域内における影響が考えられるという点である。

#### 4. 品質的な把握

次に以上のような土器様相に関係して、副葬されている土器に認められる品質差を抽出し、そこからこの地域内における様相を把らえてみたい。

各古墳群において出土している須恵器には、焼成の段階において焼成の質の異なるものが結果として生まれてくる。それは、通常品のものと不良品のものとに別れると考えられるのであるが、この各土器の品質差を示す焼成という属性に着目し全体の中に占める両者の割合を求め、地域内における時間的・空間的・古墳群内での差を読み取っていききたい。なお、品質差を示すと考えられるその他の属性としては、焼成後の形、つまり焼きひずみのあるもの（たとえば、塚原古墳群Bの8号墳に含まれる壺など）を含むかどうかという点である。ただ今回の資料については、この属性については考慮していない。

以下の表は、各時期ごとにおけその中に含まれる古墳群ごとに品質差の割合を示す表である。ただし、第1段階古層の塚原古墳群は土壙2の資料のみ、金屋古墳（この古墳に関しては2時期含む）・谷田古墳・四ツ塚古墳群・小川原古墳・第2段階の北落古墳群・栗林古墳については1古墳のみの資料である。したがってこれらの資料については、この他の資料との比較検討を行う場合等価では扱えないものであ

る。

そこで、第1段階中相・新相・第2段階の塚原古墳群、第1段階中相・新相の北落古墳群、尼子遺跡、金屋南古墳の以上の遺跡を対象として検討をおこなう。

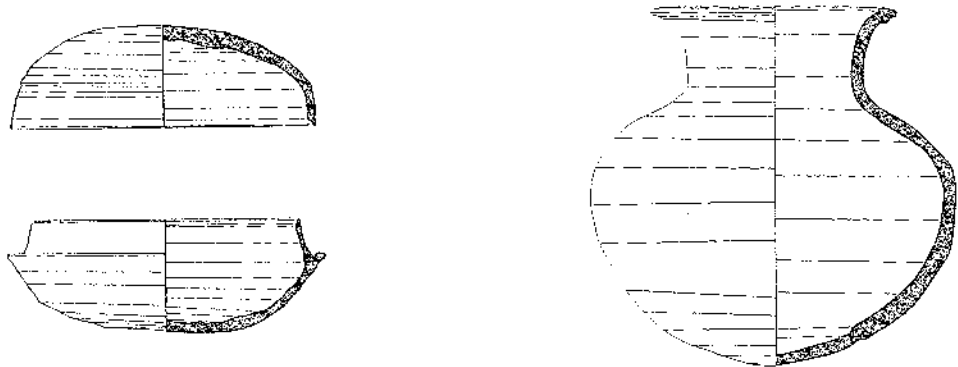
以上の資料を比較検討してみると、第1段階中相・新相・第2段階の塚原古墳群、第1段階中相の北落古墳群、第2段階の尼子遺跡の通常品の比率は、91%から96%の中に収まるものである。第1段階新層の北落古墳群と金屋南古墳群はこれらの古墳群の示す結果とは異なるのであるが、第1段階新層の北落古墳群については2基の古墳から出土した資料であるが、資料個体数の少なからこの時期における当古墳群及び当古墳の性格を明確に示しているとは考えられないと思われる。また金屋南古墳群については、現在までの資料からいうと良好なものばかりを持つ古墳群である可能性を指摘できるが、資料点数の少なさを考慮した場合その他の古墳群との比較の上で考えてみるとこういった性格の古墳群であるかどうかは不明瞭である。

したがって、現在までの資料からいうと常に10%程度の不良品を含むといえ、この地域において土器の品質差というものは時間的に空間的ににおいては大きな差異を古墳群の間に認めることができなかつたとしておきたい。

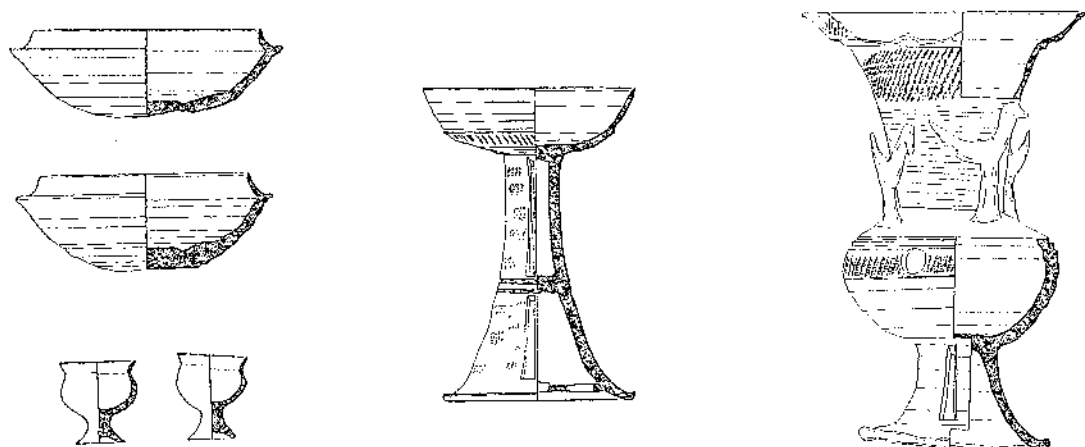
次に、地域の中において各地点間の差異または各時期における差異が見出すことができなかつたとすれば、各古墳群内における差異が認められるのだろうか。この点について見てみたい。

この地域の中で、比較的多くの資料が確認されている塚原古墳群における状況を出土個体数の多い古墳に限って比較してみると、塚原古墳群Aの第2段階にあたる7号墳が28個体中6個体が不良品で通常品の割合が約79%と、この古墳群中で最も不良品を多く含むという結果を示すものである。その他のものは80%から100%の中に収まるものであるといえる。

この結果から導き出されることは、資料が出土したものに限られてはいるが、まったく不良品を含まない古墳（装飾脚付きハソウや鈴付き高杯などの多くのオーダーメイド品を持つ塚原古墳群Aの10号墳



塚原古墳群 A・土壙 2 出土遺物実測図



塚原古墳群 A・10号墳出土遺物実測図

各古墳より出土している土器の品質差

		古墳名	個体数	品質差	
第1段階	古	塚原古墳群	8個体		100%
	中	塚原古墳群	39個体		96%
		北落古墳群	27個体		96%
		金屋古墳 (1)	24個体		100%
		谷田古墳	22個体		64%
	新	塚原古墳群	55個体		91%
		北落古墳群	7個体		72%
		金屋古墳 (2)	5個体		100%
		四ツ塚古墳群	4個体		100%
		小川原遺跡	2個体		100%
第2段階	新	塚原古墳群	131個体		91%
		北落古墳群	3個体		100%
		栗林古墳	36個体		100%
		肥子遺跡	12個体		92%
		金屋南古墳	2個体		100%



など)とそうでない古墳が存在し、かつ不良品を含む古墳はほぼ似たような割合で不良品を含んでいるということである。

以上のことをまとめて古墳に認められる品質差から性格ごとに分けてみると、古墳群内において少数の古墳においては不良品を含まない通常品の須恵器のみが副葬されている古墳が存在する。資料的に見てこの性格に合うと考えられる古墳は、塚原古墳群Aの10号墳・金屋古墳・栗林古墳等である。一方、その他の古墳においては、谷田古墳をはじめ多くの古墳が約10%から20%の割合で不良品を含んでいると考えられる。

## 5. 品質差についてのまとめ

先に見たように品質差というものは時間的・空間的においては違いを導き出すことができなかつた。このことは、古墳群としてみた場合むしろ普遍的に不良品が何%かの割合で副葬品の中に含まれるということを示しているものと把握することができる。つまりそれは、一地域内において一様に各古墳群に不良品が供給されたとして考えることができるのではないだろうか。不良品が10%程度をしめるという値が、須恵器を焼成する時点において偶然にも生まれる不良品の割合を示すものであるのかもしれない、各古墳群ごとにおいて資料的に信頼性の高いものを見ている限り差が認められないということは重要な点であると考えられる。また、通常品の須恵器ばかりを含む古墳が各古墳群内に存在するというのも、各古墳群ごとに品質差のある須恵器を供給されそこから何らかの基準によって各古墳に副葬される品質セットを決められていた可能性が考えられる。各古墳に認められる土器の品質差は、古墳群内において各古墳の差を示しているのかもしれない。

つまり、焼成後の一定量の須恵器が、一古墳群に供給され、その中で各古墳に何らかの基準をもって振り分けられた(分配された)可能性を示すのではないだろうか。

## まとめ

以上のように、犬上川左岸扇状地における古墳に副葬されていた土器様相及び品質差について見てき

たわけであるが、各テーマで得られた結果をもとに今後の課題などについて記しまとめとしたい。

土器様相については、大きく2つの画期を導き出すことができた。この土器様相の画期がいかなる要因によって引き起こされたのかについては、この中だけでは判断することができない。したがって、一連の研究の中でもしくは今後の研究の中で明らかにされてくるものであると思われる。

しかしながら2つの画期の中において、杯Gの副葬・長頸壺の副葬などといった第2段階の土器組成の動きが示しているような地域を越えての影響の下にあると考えられる画一化という動きは、この地域だけにとどまらず他地域を含めた動きの中で出てきたものであると考えられる画期である。

また、第2の画期として認められた第1段階新相を中心として認められる徳利型平底壺をはじめとしたオーダーメイド製品の須恵器の存在は、この地域における独自の影響の下に生まれてきたものでありこの地域内における大きな画期を示しているものであると考えられる。

一方古墳副葬土器の品質差については、一定の地域内において一元的に須恵器が窯場から供給され、そこから各古墳群の造墓集団に対して供給もしくは土器の振り分けがなされているのではないかと、また各古墳群内においても各古墳へ品質差のある土器が供給もしくは振り分けられているのではないかとという仮説を立てることができた。しかしながらこのことに関しては、この地域以外や他の属性をあわせた検討など今後資料を積み重ねていくことによるのみ確かなことが証明できるものである。したがって、今回の結果は一つの資料としておき、このようなことが証明できるのかどうかについては今後の課題としておきたい。

最後に今回の小論をまとめるにあたり遺物の実見など多くの面で甲良町教育委員会の宮川哲郎氏にはお世話になりました。深くお礼申し上げます。。

## 編 集 後 記

『紀要』の第10号をお届けいたします。

本号には多数の寄稿をいただいたため、紙幅の関係上、体裁を若干変えざるをえなくなりました。見にくい点等があらうかと思いますが、どうか御了承下さい。

さて、本号をもって、この『紀要』も10歳を迎える事になりました。ここに至る間には、多くの方々の御指導・御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。今後とも職員の研究活動の拠点として、さらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的な御叱正・御鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

(T・M、T・T)

平成9年3月

## 紀 要 第10号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会  
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL:(0775-48-9780)  
印刷・製本：明文舎印刷商事株式会社  
滋賀県長浜市森町中久保386